

## 児童生徒一人一台の情報端末による教育に向けて

- コーディネータ：中川 一史（放送大学 教授）  
パネリスト：山本 朋弘（熊本県教育庁 指導主事）  
：本岡 朋（和歌山市立有功東小学校 教諭）  
：稲垣 忠（東北学院大学 准教授）

### ■中川 一史

1959年北海道生まれ、横浜国立大学卒業の後、横浜市の小学校教諭、教育委員会勤務、金沢大学助教授を経て、2009年4月より現職。

2009年4月からCECの3カ年事業「21世紀型コミュニケーション力育成に関する調査研究プロジェクト」の委員長、2010年10月には、学校教育の情報化における多大な貢献が認められ、「平成22年度 情報化促進貢献 文部科学大臣表彰」を受賞、教育の情報化に関する著書多数。

### ■山本 朋弘

1967年熊本県生まれ、熊本大学卒業の後、小学校教諭、東京工業大学大学院へ内地留学、熊本県立教育センターを経て、2010年4月より現職。

昨年10月に文部科学省から発行された、「教育の情報化に関する手引き」の作成に際して「授業におけるICT活用ワーキンググループ」のメンバーとして尽力、「教員のICT活用指導力の基準」の策定、タブレットPCや電子黒板等の活用に関する調査研究などに関与。

### ■本岡 朋

1972年和歌山県生まれ、和歌山大学を卒業後、和歌山市の小学校勤務。現在は和歌山市立有功東（いさおひがし）小学校に勤務。

2007年より、和歌山市とマイクロソフトが連携して実施した「Wプロジェクト」に参画し全国に先駆けて児童一人一台のタブレットパソコンを使った教育を実践、公開授業なども担当。

### ■稲垣 忠

1976年愛知県生まれ、金沢大学を卒業の後、2003年4月より東北学院大学勤務、2006年4月より現職、博士（情報学）。研究テーマは教育学・情報教育。2010年8月より、総務省の「東日本地域におけるICTを活用した協働教育の実証に関する全体委員会」委員、寒河江市立高松小学校のICT活用指導を担当。著書「学校間交流学習をはじめよう」（日本文教出版）、「すぐできる！教育ブログ活用入門」（明治図書）など。

## ますます重要になる教師の役割

中川 一史

### 1. 背景

日本の学校現場は、ようやくデジタルテレビや電子黒板、実物投影機などの整備が進み、それにともない、指導者用（教師用）デジタル教科書・教材の活用について、地に足がついて動き出したというのが現状である。そんな中、日本でも、児童生徒一人一台の情報端末やデジタル教科書・教材についての実証研究が行われている。特に協同的（協働的）な学習活動において活用されることが期待される。

たしかに、学習者用（児童生徒用）デジタル教科書・教材は、紙の教科書では実現できない機能が埋め込まれ、それが授業評価や家庭での学習と連動されていくと、その活用の可能性はいろいろと広がると思われる。また、学習者用デジタル教科書・教材は、単に閲覧だけでなくノートとしての役割も付加されると、情報通信ネットワークを活用して交流したり、履歴を保存することで活用の幅が広がることも期待できる。さらに、子どもたちにとっては、現在普及している電子書籍端末やゲーム機、ケータイをはじめとした情報端末には抵抗感がなく、（それが大人にとって賛成であろうが反対であろうが）日常的に使われるようになりつつある。このような状況の中で考えると、ある意味、自然の流れとして受け止める必要もあると思われる。

### 2. 課題

しかし、一方で、児童生徒一人一台の情報端末および学習者用デジタル教科書・教材は、課題も多く抱えている。デジタルテレビや電子黒板の普及でも見られるように、ICT機器の導入や更新には莫大な予算が必要だ。これをどこがどのように捻出するのか。各地域任せにしているのは、いつまでたっても導入できない地域が出てくる。

また、どんなにデジタル教科書・教材が入ってきても、それだけで授業が成立するとは思えない。そうなると、紙の教科書とどのように併用していくのか、その役割を十分に検討していく必要がある。つまり、紙の教科書やノートあるいは板書との役割分担を追究していくことで、より教育効果があがる可能性がある、ということだ。また、学習者用デジタル教科書・教材で児童生徒が個々に情報端末を操作するようになると、これをどのように教師が把握・指導していくのか、教師側の力量も問われることになりかねない。教師が教室内をまわって児童生徒の状況を把握する以上に、より簡単にプラスαの効果ののぞめる仕組みになるのかどうか。児童生徒の情報端末のデータ整理のためにPCの操作に四苦八苦して、児童生徒の様子の把握がおろそかになる、というのであれば、本末転倒だ。

### 3. 授業研究としてのICT活用

先日、あるICT活用の研究をしている学校でこんなことがあった。若手の教師が算数の授業の終盤に、子どもたちの考えを実物投影機を使って大型提示装置に大うつしにして、共有化を図る場面だった。授業者から、「実物投影機は、その場ですぐに子どものノートを大きくすることができ、黒板に書かせたりしなくてよいので、時間の短縮にもなり、話し合う時間が増える」という説明があった。これ自体はまったくその通りだ。実物投影機の使い方としても、問題ない。

問題は何かというと、「なぜA君のノートを取りあげて、先生はクラス全体に提示したのですか？」と授業者にお聞きしたところ、回答が返ってこなかったことにある。つまり、ICT活用場面としては、良いのだが、肝心の「授業の流れにおいて、誰のノートを提示して、何を考えさせるか」ということが明確になっていなかったのだ。これでは、せっかくの実物投影機も意味をなさない。教師がどのような意図で、ある子どもの考えを全体に示すのか、そこが明らかになっていることは授業の基本中の基本であると思う。ICTを使えばそれだけで授業が良くなるわけではない。ICTを使わない授業で大事にしてきた部分は、ICTを使った授業でも当然大事にすべきなのだ。

教室や学校に新しいテクノロジーがやってきて学習環境に変化がありその結果、新しい授業スタイルが生まれたとしても、教師の、願いを持ち、子どもたちの実態を把握し、目標が何であるかを確認し、しっかりと教材研究すること、そしてそれらの整合性をいつも吟味することの重要性はいつの時代になっても変わらないのである。

これらを考慮した上で、児童生徒一人一台の情報端末など新しい教室環境について可能性を吟味したいと考える。

本パネルでは、登壇者がそれぞれの立場から、児童生徒一人一台の情報端末による教育に向けての先進事例の成果と課題、あるいは授業実践について語られる。

### MEMO